横浜善光寺留学僧育英会応募論文

世界の交流のための仏教

マルク・W・スターヘル・圓成

A. 序文

禅の修行のために日本の地にブラジルより渡来してから早三年有半が経過した。今に至ってようやく「修行」とか「僧堂生活」の言葉の重要性が理解できるようになった。出家生活に入るべく長年育んできた夢を実現するため、農業技術指導の職を辞そうと決意した七年前から、凡ては始まった。幸いにしてその時、私の禅との出会いが始まったサンパウロの曹洞宗南米別院の仏心寺で、孤圓先生との相見が実現した。

B. 歴史的背景

人口一、七〇〇万のサンパウロ市の東洋地区（バリオ・ダ・リベルダデ）にある仏心寺は、ブラジルの日本人社会に深くかかわっているのであるが、しかし一九六〇年代からブラジルの一般の人々に曹洞禅を弘布すべく重要な活動を行うようになったのである。特筆すべきは最初の総監新宮良範師の努力によって、日本人社会

に寺院が建立されたが、その後禅の学習や摂心のために、仏心寺の門が一般に開放されるようになった。そのときを通じ北米やヨーロッパで禅への関心が急速に増大するようになったと同じ現象が、ブラジルにも興ったのである。寺にも修行僧が入るようになったが指導者も五十嵐、徳田師と継ぎ、特に徳田先生はブラジル人達への積極的布教を開始した。仏心寺の他でも摂心が行われるようになったが、同時にサンパウロ以外のブラジリア、ポルトアレグロ、ベロホリゾンデ、リオデジャネイロ等の地においても新しい禅のグループが活動を開始するに至った。一九九〇年代の終わりころから新しく総監に就任した森山大行老師が日本から渡来して活動を開始し、その指導下で、ブラジルの禅は新しい躍動が始まった。老朽化した寺院は廃され、新しい寺院施設が建立された。老師はきわめて心の広いおおらかな人物であり、また西欧に禅を弘布しようとしていたから、一九九五年にはブラジル人の尼僧クラウディア・デ・孤圓（通称孤圓先生）と夫の村山省三氏が仏心寺に招かれて、そのスタッフに加わるようになった。孤圓先生は出家得度の師である前角老師の下で、一九八一年にかの有名なロサンゼルス禅センター（ZCLA）で禅の修行を開始した。孤圓師は前角老師の膝下で四年間ZCLAで修行し、老師の侍者を一年間勤めた。前角老師の弟子の一人は日本に渡り、僧堂で正規の修行を行ってる。その後孤圓師は愛知尼僧堂の青山老師の下で、修行と法戦式を行っている。尼僧堂には八年以上安居し、師の前角老師の助言により、小田原大雄山の山主余語翠巌老師から嗣法している。新しい寺の竣工後、孤圓師は仏心寺に帰山したが、森山老師は総監の職を辞さなければならなかった。禅についての講話や摂心の組織化、受戒グループの結成とか、孤圓先生の努力により教団

も増大を遂げ、禅も確実に前進を続けている。今では二つの僧団ができている。孤圓先生の流暢なポルトガル語と交流の巧みさによって、今ではブラジル人社会でもその名が知られるようになった。孤圓先生は次第にいろいろな会合に招かれるようになり、メディアでのインタビューも増えている。さらにキリスト教グループも異なる宗教間の壁を越えて交流を行うようになり、坐禅の指導を受けている。

C．初心者の心―仏心寺での修行―

私にとって一九九五年は孤圓師の下で坐禅修行を開始する、重要な機会であった。当時の仏心寺は、日本人社会の年忌供養、葬儀などの要望に応えて、それに従事するという日本的寺院の生活を行うと同時に、坐禅の実習や禅の学習、あるいは受戒や禅のグループの勉強の場でもあった。一般的にブラジルの人々は、禅については鈴木大拙博士やユーゲン・ヘリーゲルやA・ワッツなどの著書からその知識を得ていた。しかしながら坐禅の経験もほとんどなく、禅についてのより深い理解もなかった。禅の祖師達の悟りによる公案や悟りの実現についての興味や関心は極めて一般的なものであり、誤解もあった。時には真の禅の師から認められた悟りを求めて、仏心寺を訪ねる人もいた。仏心寺は、僧侶と日常生活において体験できる機会を提供し、禅へ自然に親しめるように心がけていた。私の仏心寺での修行は、寺の維持管理やあらゆる種類の仕事の手助けを行うことが、基本的なものであった。私たちは日常の坐禅、朝課、作務、典座、接賓及び組織作りなどに深夜まで従事した。週末は数多くの追善供養の法要や土曜の坐禅会などで多忙を極めた。一週を通じて夜にはポルトガル語による提唱があり、初心者の坐禅指導や戒を受けることを希望する人々の受戒グループ

に対する指導が細部にわたって行われた。一年間の修行の後、私は師僧から得度式のための袈裟と座具を縫うことを許可された。

重要なことは仏心寺では私は寺院の日常生活を体験し得たことであって、禅への知的な面からのアプローチと隔たっていたり、一面的なものではなく、常に何かを行っていることが大事なのである。このように仏心寺で僧侶の手伝いや助手的な役割を果たしたことが、正規の修行のために大本山總持寺に安居すべく、日本への長い旅立ちの準備を可能にしたのである。

D. 自分自身の規準を作るべきでない
―大本山での修行―

外国人の一介の僧侶である私にとって、事前の準備も日本語の十分な知識も先輩後輩という長幼の序列についての理解もなしに、日本人の修行者と同じレベルで僧堂において修行を行うことは至難のことと思われた。しかし、僧堂生活での厳しさの中で、無心の喜びの感覚はどのように説明すべきであろうか。現実の生活体験として謙虚の美徳とか「自己を忘れること」について、いかに学ぶべきか。われわれ禅の修行者は「身心脱落」という道元禅師の課題を、いかに追求し実現することが可能か。確かにこの経験は仏法のために仏教徒としての実践に従事する場合に、全身を通してのみ実現されるのである。真実の目標と堅い決断とを持って、修行道場においてこの仏教の原理を発見することができるのである。そしてこれを通して、真の心の平安が得られるのである。総合的な実践や個人的な努力の結果、私と他の人々との距離はしだいに縮まっていったのである。人びととの関係は調和を保ち、私たちは他の人々や周囲のことに気を配る余裕ができてきたのである。

E. 仏法の実現

日本は厚い仏教的伝統を持っているから、何世紀にもわたって固定化してしまい、学ぼうとする人々にとっては必ずしも十分なものではなかった。一方ブラジルは経済的、社会的問題から、人々は現実の理解や心の平安をもたらす宗教的実践を求めつつある。ここ三十年ほど前から、ほとんどキリスト教的背景を持つ多くのブラジル人が、仏教の実践を求めてくるようになった。チベット仏教のグループはいたるところで急激に増大しつつあるが、これに反して禅の教団は浮き沈みが激しい。その主なる理由は、指導者の頻繁なる交替と内部紛糾とである。

今年の初めには、同じような理由から、孤圓先生は仏心寺での不休の六年間にわたる激務を、辞さなければならなくなった。現在先生は新しい禅仏教の会の指導を行いながら、同時にサンパウロ市の禅センターの僧伽設立のための、組織づくりに従事している。孤圓先生はもはや南米別院の支援に従事することができなくなったが、アメリカの法友達の精神的支援を受けつつ、以前より増して前角老師の教えに親近しようと、更なる努力を続けているのである。前角老師の教えは、只一言「耐え忍ぶべし」である。

今現在、私たちはブラジルで新たなるスタートについたのだが、次に、将来にいくつかの希望と目標とを概説してみようと思う。

F. 架け橋

先に観てきたように日本における修行の可能性は無限であり、今も継続している。私は今、現在の仕事と教団の支援のために、ブラジルに帰国する計画を立てている。

具体的には通常の禅の修行と週末の参禅会とか、摂心のためのブラジルの新しい「マウンテ

ン禅センター」の設立計画に従事する機会を得たのである。森林と四部屋の家のある約二〇万坪の農地の寄進を受け、既に第一歩が踏み出されたのである。「セラ・ダ・マンティクウェイラ」山地の頂上一、二〇〇メートルの高地にあるこの土地は、最も近い村「ペドラ・ベラ」から一三キロメートル、サンパウロ市から車で約一時間半の距離にあるが、人家からまったく隔絶している。周囲の一〇キロメートルの道路はまだ舗装されず、あとの五キロメートルは勾配が危険な道である。公共的なサービス機関も電氣も水道も電話の回線もなく、激しい雨の場合はこの土地に行くことは大変な決断を要する。一方では七万坪ほどのエキゾティックな植物が繁茂する原生林があり、狐・アルマジロ・リス・猿などさまざまな鳥類・昆虫などに満ち溢れた、野生の環境そのままが残っている。水は清純な山の水の豊かに湧き出る泉から、供給可能であり、私たちは地平遥かな、絵に描いた様な美しい光景を堪能することができる。

昔から仏教は、たとえかなり人工的なものが加わってきても、常に自然に密着した関係を保ち自然環境に深く配慮して発展してきた。そのことは仏教を理解するための重要な観点なのである。かつてアマゾン地域で仕事をし、二〇年以上も田舎生活を体験してきた一僧侶として、私は特に国際的な地域においては大地や植物や動物たちとともにありながら、さらに自然と密着した関係を得ることと、あらゆる生あるものと相互依存の関係にあるという感覚と、自然に基づいているという精神の実践を発展させることが人びとにとって必要であるという認識を得るに至ったのである。

プロジェクトの第一段階として、私たちは基礎施設と給水及び太陽エネルギーの装置を建設しなければならない。

二五人ほど収容可能な僧堂と修行者の居住家屋も建設しなければならない。さらに新しい野菜やハーブなどが植栽され、そこに居住する人々は総合的な作務を通して、私たちが食べることを許される食物に対する感謝と、ありがたさを発見することができるようになるであろう。

さらに本堂と観音堂と浴場も、建設されることになるであろう。特産物の種子の苗床などの整備や、浸食された地域への再植樹などによる、エコロジー環境の保持なども注意深くなされるであろう。これらのことが、大地や水資源や野生植物の生命の保護、さらには環境に対する意識の向上や、近隣の農民たちとの親交を深めるよい機会や、さらにはもっとも容易にして効果的な仏教の伝導に資することなどを、約束することとなろう。

四年前に計画したこととは相反して、ブラジルに帰国した後、南米別院仏心寺で働くことはもはや不可能であろうし、孤圓先生が述べているように、自らの足で歩まなければいけない時が来たのである。

私たちの法友や支援してくださる人々の援助を仰いで、本年末ブラジルに帰国するや直ちに、このプロジェクトの実現に取り組む所存である。

G. 私の希望

テロリズムの悲惨さに関連する世界を巡る最近の政治的問題によって、人々はこの地球上の貧富の差のあまりにも大きなことに気づき始めた。すべての地域で、人びとは人道的支援のための積極的活動の必要性を痛感している。

福祉は以前にも増して、他者の問題に関連しているのである。より広い立場から見れば、全地球的に大きな意識の変革が、いまや進行しつつあるのである。

これからは、観音様のお力をお借りして、私

マルク・W・スターヘル圓成　MARC・W・STAHEL・ENJO

ふりがな	まるく・W・スターヘル・エンジョー
生年月日	1964年３月２日　満37歳
国　　籍	SWISS／BRAZIL　スイス系ブラジル
現住所	東京都品川区　桐ヶ谷寺
学歴・職歴	
1982.12	R.スタイナー校卒業（サンパウロ／ブラジル）
1986.12	ブラジルのピンハルにおいて農業工学士学位
1993.95	ブラジル／シティオ・ポルタオにおいて宗教的共同生活体験
1995.98	曹洞宗南米別院において出家得度　仏心寺にて孤圓先生に就く
1998.00	桐ヶ谷寺から大本山に安居　總持寺にて修行
2000.01	仏国寺　原田湛玄老師に就き修行
2001.01	桐ヶ谷寺にて法戦式（法憧師　黒田純夫老師）
特　　技	語学（英語・ドイツ語・ポルトガル語・スペイン語）ガーデニング・有機農業

が修行期間を通じて日本で学びえたことを伝えるべく、ブラジルの人々にとって役立つ人間になりたいと念願している。

謙虚さと慈悲と知足という禅仏教の理念は、世界の真の平和と、全人類の救済のために宣揚されるべきである。

ご慈慮に深謝いたします。合掌

（福田孝雄　訳）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

留学僧として私の学ばんとすること

マシュランコフスキー・ジェルミ・観禅

仏法との出会い

まず初めに私が仏法に関心を持ち始めた頃の、約二五年から三〇年前のポーランドの状況について二、三語らなければならない。

非仏教国において仏教の学修や実践を始める際、私たちが遭遇した諸々の問題を検討することは重要なことである。当時のポーランドは、共産党政権下の旧ソ連の支配下にあったし冷戦の真っ只中であったので、宗教研究の自由はなく、基本的には仏教研究は不可能であったのである。この不幸な状況の根本的理由は、まったく政治的なものであった。それは、精神的な事柄に関する自由な探究を含む、凡ての分野における自由な交流を疎外するものであったのである。当然のことであるが、自由に旅行することは許されなかったから、何人も日本やインドに往くこともできなかったし、その資金もなかったのである。私たちが仏教について学びうる方法は、ひそかにポーランドに持ち込まれた数少

ない書物による他はなかったのである。この地区に収蔵されているポーランド語の図書は二冊しかなく、しかもそれを借りることは出来なかった。その本の一冊は、ポーランド語の「四句誓願文」に関するものであった。この書がいかにしてインドからポーランドにもたらされたかは、この論文の主題ではなく、もっと大切なことを述べなければならない。端的にいうと一般社会ではまったく自由が拘束されているから、この観点からすると、西欧諸国とはまったく異なっていたのである。特に宗教に関してはポーランドは他の強力な権威、つまりカトリック教会の支配下にあったし、今なおその状況は変わらない。そしてそれが、さらに状況を悪くしていたのである。その当時仏法に関して学ぼうとする者は、皆変わり者か常軌を逸した者とみなされていた。一九七三年に少数の人が集まって仏教を学ぼうとし、ようやく英語の図書を入手することができた。しかしながら当時のポーランドの教育事情は、ヨーロッパ諸語の学修において、きわめて貧しいものであったので、入手した仏教図書の講読、翻訳、解釈に重大な問題や支障をきたした。しかも来訪のための資金不足から、仏教の教師はポーランドにまったく来ることはなかった。

最初に来訪した教師たちは次のようなものである。

一、約十年間日本で坐禅修行したというアメリカ人であるが、師家でもなかったし、日本語も堪能でなかったから、ただ坐禅の仕方とか彼独自の哲学を教えるだけであった。

二、韓国人の僧侶であるが、強い国家意識を強調し、それをもってポーランドの弟子を感化した。

三、デンマーク人であるが、チベット仏教を教授したが、真正のラマではなかった。

ともかく以上三人の仏教者がポーランドに来たのであるが、真実の仏法を教示するものではなく、唯その教説は個人的見解によって、強く影響されたものであったのである。

学道の主題

私が「妙法蓮華経」のような経典を学び読み解く過程で、気づいたことは、仏法をめぐる理解や解釈のレベルにおける多様性についてである。つまりそれはわれわれ人間の一般的限界を、はるかに超えたものであった。それ故テーラヴァーダと大乗、経典解釈学の伝統、毘婆沙論や瑜伽唯識や中観論の仏教、また戒律のさまざまな伝統、さらにチベット、中国、韓国、日本、スリランカそのほかの強い民族的伝統などは、たとえいずれの仏教がより良きものであるかとかの、人間的領域の問題や大乗間の論争や大乗内においても瑜伽行派と中観派との対立など、純粋に仏法内の領域の問題など凡ての範囲について理解するための十分な時間があるにしても、我々を惑わすものであった。

それ故に何年かの研究の結果一つの目的を設定する必要があったが、それが様々な仏法の共通の基本的立場を見出そうとする願望となったのである。そしてそれを通じて難しいポーランドの状況があったが、異なる諸伝統の間における国民的誤解に対処することが可能となったのである。日本の仏教者や他のアジア諸国の仏教者にとっては、何か不思議な、不必要なことと思われるかもしれないが、非仏教国にとって仏教が定着する以前の様々な伝統の相違点が、明確にされるべきであるということを理解しなければならない。例えば日本では、中国やチベット仏教の教説についてあれこれ考える必要はないかもしれないが、ポーランドでは存在する様々な仏教の表現は凡てを難しくしているのである。

つまりそれぞれ異なる教説が、法を説く人によって述べられているからである。もしわれわれが仏法の正しい理解をなすことができれば、ポーランドの未来のまじめな仏教徒の時代のために、大きな貢献となるであろう。そしてそれは、この国に調和と平和と幸福とをもたらすこととなろう。そうなることによって、仏陀とその正しい後継者たちによる適切なる法の教えを回復し、凡ての相異を克服すべきなのである。そしてわれわれは、まさに輪廻の苦縛から人間を解放すべく、救済と真実の法の伝達に努力した祖師方を敬愛するために、様々な仏教国における仏法の歴史的発展（それは他方では人間的要素と名づけるべきであろうが）の更なる理解に努力しなければならない。

いろいろな歩みの中で、その一つは仏教図書館の開設と仏教研究部門（DBS）の設立という方法によって、実行に移されている。公共図書館の一部分で、シュチェチンのポメラニアン・ライブラリーと呼ばれているものである。ポメラニアというのは、ポーランドのある地域の名称である。DBS（仏教研究部門）は「仏教図書プロジェクト」と称される計画から始まった。計画そのものは、すでに存在している仏教教団の助言と指導に基づいて、世界との交流を通じて、様々な計画や方策が検討され、その実現を目指したものである。努力の結果我々は大正大蔵経、チベット仏教書、中国撰述の図書およびヨーロッパ諸語に翻訳された図書など、多岐にわたる図書を網羅する膨大な図書を収蔵するに至ったのである。われわれはさらに多くの図書が、将来されることを希望している。この図書館は、すでに収蔵された資料を用いて、仏教学に関するマスター（修士）論文の課題に取り組み始めた若き仏教学者を含む、多くの人たちによって利用されているのである。高価なたくさ

んの図書を寄贈して下さったインドのロケシ・チャンドラ教授のような、著名な学者の支援も得ることができたのである。それはインド大使のお祝いを頂き、シュチェチン市のこの式典には、公式訪問を取り計らって下さったのである。

この図書館の公式設立は、二〇〇〇年五月にダライ・ラマによってなされたことは、特筆に価するものである。ダライ・ラマはシュチェチンの城で数千人の聴衆に向かって講演されたが、さらに多くの聴衆が入場することができず、場外に溢れていた。この二〇～三〇年以来の大きな転換について書くのであるが、まさにわれわれが一〇～一五人位の友人たちが集い、敵意と不満足な環境の中で仏教の探究を始めた時期であった。

このすべての背景の裏には、結局個人的な要素が存在するのである。即ち仏教の教説にまったく無知なポーランド人は、どのような方向に進んでいくのであろうか。先に私が述べたようなポーランドでは、法の真実の意味の誤解と誤った解釈のために大きな危険があるのである。すでに私は私自身の多くの被害について見てきた。幾世紀幾世代にわたる仏教徒たちの中で生活することは、自らの古い習慣（それは仏法に対立するものであるかもしれないが）を脱ぎ捨てるに、あづかって大きな助けとなるのである。しかしその過程は、時として苦痛に満ちたものである。仏教を単に知的に理解するだけでは誤った方向に進んでしまうだろうし、それは如何に多くの時間を瞑想やその他の実践に費やしても何も役にも立たないのである。まさに真実の法が、現実に生きる人びとの発展に寄与したかを観ることは、ポーランド人に内省のための国家的背景を知らしめ、また自己中心的な考え方を捨て去るのに役立つであろう。

私の強く望むところは、坐禅の実践によって

生ずる慧眼によって瑜伽行派や中観派の教説を正しく理解し、その教説を正しく援用することと、正しく認識することなのである。偉大な道元禅師のような著名な祖師達は、明確にその道程を提示されている。しかしながらポーランド人の精神的混迷にとっては、その過ちを除去するためには、われわれの精神活動がその変更の中で、いかなる方法があるかについて正しく理解することが必要である。道元禅師でさえ、八正道を含む四諦の妥当性を肯定している。八正道は正しい見解を最初に設定している。正しい見解なしに、いかにして仏陀の説く道を正しく探究し得るであろうか。

述べられるべき凡ての背景には仏教教団の働きがある。それは私の古き法友達の支援によって設立されたのであるが、その教団の活動状況を鮮明にするためには、その活動をまず紹介することが必要である。

ポーランドにおける仏教教団は、非宗教的仏教徒の組織体である。それには二つの目的がある。

第一は仏教諸国におけるポーランド僧尼の教育と奨励と支援である。教団はすべての宗派に解放されている。仏教の僧尼になろうと希望する何人もそれぞれの機会によって、如何なる既成の宗派においても得度することが許されるのである。教団の活動は釈迦牟尼仏陀の教説に基づいているが、宗派的な相違の形態や抗争は受容されることはない。

第二の教団の目的はポーランドにおいて、一般の人々でも理解できるように釈迦牟尼仏の教説を弘布することである。しかしながら仏教思想のポーランド社会への紹介には、何か異常なセクトやカルト的である仏教の多くの非仏教国の一般的絵画などは敢えて除外される。

教団はアジア諸国のさまざまな仏教教団の主

なる人々との交流は、維持してゆきたいと考えているし、適当な寺院や道場を探し出すことによって、そこで推薦された者は得度を受け、そしてその研究や実践の進展をはかることができるのである。教団の目的はポーランドにセンターの設立をはかり、正しく修行した僧尼がそこに居住し精神の修練を継続して行えるようにすることである。そこは仏教に関する情報を提供する、センターとして機能する。サンガの会員は在家の人々の宗教的な要望を支援し、そこで在家の人々はサンガの活動を理解し、仏教徒の社会で活動を行うことになるのである。実践と研究に関しては、凡ての会員は夫々の伝統に基づいて自らの責務を履行しなければならない。

先述の教団の目的に追加することは、以下の如きである。

(1) 古典あるいは現代の師家または教師の作品を含む仏教書と同じく宗教、文化、社会に関する仏教誌の編集と出版。

(2) アジアの仏教諸国の現代語あるいは古典語をマスターした翻訳者の養成。

(3) 仏教全宗派の経典の翻訳、編集および出版。

(4) 師家あるいは教師との組織的相見を通じて正しい仏教の教説、見解および実践において正当なる指導を行う。

(5) 宗教的実践の諸種の形態の組織化を可能にすること。

(6) 青少年の教育、家庭生活、貧者の救済、地域社会の老人、病人のための福祉活動の促進および仏教思想に基づく環境に対する関心の高揚を図る。

ポーランドの仏教教団は、ポーランド政府によって宗教法人として認可(認可番号No.A/97)を受けた。仏教教団は、ポーランドにおいて発生する新しい宗教的活動によるあらゆる問題の

観禅マシュランコフスキー　KANZEN MASLANKOWSKI

ふりがな	マシュランコフスキー・ジェルミ・カンゼン
生年月日	1958年10月18日　満43歳
国　　籍	POLISH　ポーランド
現 住 所	東京都品川区　桐ヶ谷寺
学歴・職歴	
1978.10	シュチェチン大学ポーランド哲学文学部入学
1982.01	同大学中退
1975.07	坐禅実習・仏教学研究開始
1987.10	仏国寺原田湛玄老師の下で坐禅修行
1987.10	桐ヶ谷寺で得度。2000.02嗣法、2000.10瑞世
1992.08	仏教教団創設　以後、同教団にて活動（ポーランド）
2000.05	ダライラマ、ポーランドに図書館開設。シュチェチン市にて仏教研究
1990、1998、2001　大雄山最乗寺　余語翠巌老師、石附周行老師の下で安居	
特　　技	語学（英語・日本語・ドイツ語・ロシア語・スラブ語）

分析において、ポーランド政府や議会と連携して活動している。ポーランドにおいて仏教が正当なる宗教であると認知されるであろう法律を整備するには、長い時間を要する。この法律が成立すれば、ポーランドにおける仏教の発展を擁護することになるであろう。

以上述べてきたことの結論として、日本に滞在して学道に精進している一僧侶としての私は、如何にして自身と他の人々の法の発展をはかるべきか、また全人類の永遠なる幸福と苦からの解脱のための最善の方法に寄与すべく、この論文において掲げた凡ての目標に如何にして到達し得るかを学びたいと念願している。

（福田孝雄　訳）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

仏教・文学・その他—異文化の中で仏教を学ぶ

陸　晩霞

子供の頃、長い間祖母の家に厄介になっていた。祖母が家事の合間に「心経」をよく読んでいるのをしばしば耳にした。独り言みたいに、いったい何を言っているのか、幼い私にはさっぱり分からないわりに、あのリズム感に富んだ調子が印象深かった。そして、やさしい祖母が、一心不乱に読経しているのを私達子供に邪魔されると、いつも怒り出したのもまだはっきり覚えている。それは、文化大革命が終ってまだ間もなく、あらゆる宗教が封建的かつ迷信的なものとして扱いされる時期のことだった。

再び「心経」と出会ったのは大学院時代の短期日本留学中であった。夏のゼミ合宿で京都に行き、泉涌寺附近の悲田院に泊まった。その翌朝、早く起こされた学生皆は本堂のほうへ集まってから、院主の唱導について朝課を開始。いくつかの真言と般若心経をあげた。日本語読みに慣れていないため、私の口から読まれた経文は恐らく途切れ途切れだったが、配られた冊子に漢文で書かれた「色不異空、空不異色、色即是

空、空即是色」等の文句は深く脳裏に残った。つい思い出されたのは、七十年代のある台湾歌手が書いた歌にもああいう歌詞のあることである。ポップソングにまで仏教経文が引用されたとはやや意外であったが、仏教と文学ひいては文芸とはそもそも縁の遠いものではないだろう。このことに開眼したのは確か日本の古典を勉強した後のことである。

大学の後半から大学院時代にかけて、私は日本の中世隠者文学を専攻としていた。『方丈記』や『徒然草』を読んで、それを理解するために、仏教書や仏教関係の知識に触れなければならないことになった。例えば、無常観について。人間として自然生得の部分もあるが、無常観は基本的に仏教原理の一つであることが分ったのである。「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくの如し」とは『方丈記』の書き出しで、従来無常観を表す名句とされている。これと同様に、『徒然草』では、「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり」などが注目される。ただ、鴨長明の詠嘆的無常観（ある意味では、消極的とも言える）と違って、兼好の無常観がむしろ自覚的（積極的）と目されるのは学界内の定説になっているようである。それは、両出家者の存命していた歴史時代背景の違いに関わっていることはいうまでもないが、基本的には両者とも「無常迅速」という仏教の理に一致している。

「大般涅槃経」の聖行品に「無常の偈」が見える。「諸行無常、是生滅法。生滅々已、寂滅為楽」という。中世文学の中では、この偈を具象化・文学化したのは『平家物語』にほかならないといわれる。確かに、「祇園精舎の鐘の声、諸

行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす」があるように、この有名な序章から既に仏教的無常の基調が定められている。

無論、無常観だけで中世文学を眺めるのでは視野が狭すぎる。現に、中世におびただしく現れた仏教説話集には多様な仏教の教えが示されているほか、信念の文学といえば、源信の『往生要集』、親鸞の『歎異抄』、道元の『正法眼蔵』、日蓮の『開目抄』など、まことに枚挙にいとまがない。但し、これら日本仏教各宗開祖たる人物の著した典籍が文学ではなく哲学であると主張する者もいる。それはそれでも結構だが、室町時代の五山文学については、その名の通り、文学視されるのにもはや異存がなかろう。平安時代の漢詩文が姿を消した中世に日本の漢文学を支えたのは主に禅林の僧侶であるとされる。来日宋僧の影響も当然無視できないが、義堂周信、絶海中津らの存在は中世漢文学の空白を埋めたといわねばならぬ。更に広い意味では、それを仏教が日本文学に寄与したものと見てもよかろうか。

そこで、私は思う。何故日本文学に仏教はこれほど深く参与しているのであろう。

この疑問を他日、ある思想史の先生に持ちかけたら、「それは特に日本の問題じゃない。キリスト教やユダヤ教などの世界だって宗教文学というのがよくある現象だし、むしろ中国にそれが稀薄であること自体がおかしいんだ。恐らく儒教思想が長く深く影響してきたからじゃないかな」と、逆に中国が問題の対象とされた。そう言われれば、そのとおりかもしれない。

ところで、考えてみると、中国文学、特に古典文学がまったく仏教に無干渉とは決していえない。それどころか、仏道に精通する古代の中国文人が少なからずいたのである。

盛唐の詩人王維は詩歌・書画・音楽三拍子揃って長じていた、いわゆる風流人である。その「詩中に画あり、画中に詩あり」と後世が高く評価している原因の一つは、彼の作品に潜んだ禅的境地であろう。

木末芙蓉花、　木末芙蓉の花、
山中發紅萼。　山中紅萼を発く。
澗戸寂無人、　澗戸寂として人無く、
紛紛開且落。　紛紛として開き且つ落つ。

（「辛征夷塢」）

人のいない「空」の世界が描かれている。そして、山中で辛征が誰もいないのに全然かまわず、ただ自然に花を咲かせ、花を散らすのである。このように、よく「空」や「自然」を詩や画で表現した王維は、実は詩仏と呼ばれるほど仏道に関心を寄せていた。彼の字は摩詰。言うまでも無く、インドの維摩居士に因んだものである。

また、中唐に下ると、白楽天がいる。中国の古典にはさることながら、日本文学にも多大な影響を与えた白氏はまさに儒仏道三種の思想を貫通融合して一身に具えた典型である。ことに、彼が最初に提唱した「狂言綺語の過ちを以て転じて将来世世讃仏乗の因、転法輪の縁とな」す文芸観は平安朝以降の文学にどれだけ受容されたか。このように、歴史を辿っていくならば、仏教と中国文学とのつながりを発見するのも難くない。

室町時代の禅僧天隠龍沢が曰く「詩ノ外ニ禅無く、禅の外ニ詩無し」とある（『錦繍段』序）。これは「詩禅同一」の見解そのものであるが、一方では仏教と文学が必ずしも両立不可能ではないことを示した。事実、このような観念のみに止まらず、日中両国の歴史上、詩僧や画僧などと称された仏道修行者が輩出している。これによっても、仏教は東洋文化の構築に対して如何に貢献してきたかを知らされよう。

釈尊が仏教を創立した目的は人々を解脱の道へ導くことであろう。ところで、二十一世紀に入った今日では、仏教のその役割はどのように果たしていくべきかというと、やはり人々に心豊かに生きることを教えなければならぬと思う。つまり、傷ついた心を癒して、枯れ果てた心を潤して、怠惰な心を奮い起こしてあげるのに努めることだ。一方、東洋伝統文化の多くには、ゆとりのある心を養う効果のあることがよく知られる。詩を吟じれば、胸中のわだかまりが消えうせ、琴を繰れば、高山流水の雄大浩然たる想いに浸る。その世界では、現代人がよく口にする「切れる」とか「むかつく」などの言葉はどこにも存しないのであろう。言い換えれば、文芸には坐禅と同じ様に人の心を静める力があるのである。したがって、若し仏教の大前提が衆生を利益することならば、伝統文化を守ることは仏教徒にとって精進の一方便にもなるのではなかろうか。この点に関しては、今日でも日本の寺院に茶・華・香などの古い日本文化がまだ息づいていることはまことに喜ばしい。これに対して、清浄たる地と思われる寺院でも市場経済の影響を受けてややもすれば文化離れになりかねない中国の仏教界は、日本に学ばなければならないことが多いと痛感する。これは、恐らく異文化環境に身を置きながら、中日両民族とも信仰する仏教を学ぶ中、私の最も深く悟ったものであろう。

ある仏縁により、私はある若い中国のお坊さんと知り合った。中国南のある名も知らぬ山にこもって、かつてそこで栄えた唐代の廃寺の復興作業に取り組んでいるその方の仏道修行には、悠久たる中国文化の伝統を引き継ぎ、そして広めようとする内容が伴っているように感じられる。再建のお寺には今度琴苑、画苑のほかに、渡日宋僧東皐心越の研究会も附設されるという

青写真。その建設途上の困難と辛苦はさぞ並々ならぬものであろう。

ところが、私にそう質問されたら、次にような漢詩を送ってくださった。

遺棄塵労観舞鶴、　塵労を遺し棄てて舞う鶴を観、
遠離俗事想超然。　俗事を遠く離れて超然たることを想う。
若知精進多苦処、　若し精進に苦しき処多きを知らんば、
何不携琴柳下眠。　何ぞ琴を携えて柳の下に眠らざらんや。

艱難辛苦にもめげずに精進していく決心がよく読み取れた。この詩を以て私自身への励ましにもしたい。そして、その方の悲願が一日も早く成就され、仏教が人類文化への新たな貢献を見るのを期待してやまない。

陸　晩霞　LU WANXIA

ふりがな	りく　ばんか
生年月日	1973年04月12日　満28歳
国　　籍	中華人民共和国　浙江省
現 住 所	東京都世田谷区
学歴・職歴	
1991.08	中国　浙江省滸山中学高校部　卒業
1996.08	〃　北京大学日本語学科　卒業
1996.09	〃　北京大学大学院に進学
1997.09	日本　大東文化大学大学院にて国費留学
1998.10	帰国　北京大学大学院修士過程を継続
1999.07	中国　北京大学大学院修士過程終了　学位取得
1999.08	中国浙江省海外観光局に入局　勤務
2000.09	留学のため同局辞職
2000.10	日本　東京大学大学院研究生として入学
特記事項	1994.95年の二回日本語で書いたエッセイ「夕暮れ」と「家路」が日本国際文学奨励基金随筆募集で優秀賞を受賞
免許・資格	中国全国観光ガイド資格取得（2000.01）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

世界平和と仏教徒の誓願

孟　東　燮（宗黙）

今の世界の現状を人々はよく激動の時期であると言われている。最近、五十年の間に世界は農耕社会から産業化社会へ、産業化社会から情報化社会へ急に変わってきたからである。今もなお「ＩＴ革命」と呼ばれているように革命と言うべき出来事がどんどん起こっているわけである。数千年の間にあまり変わらなかった農耕社会の大家族制度と自然環境は、産業化時代に入ってから今まで人々が経験したことがなかった色々な問題を生み出されるようになった。特に、大家族制度の崩壊と自然環境の破壊はその代表的な変化である。世界第二次戦争の終戦と共に始まった本格的な産業化は、自然と人間と社会に対する根本的な変化をもたされた。人々はだんだん自然から離れ、産業化の中心である大都会へ移動を始めるようになった。人々の大都市中心への移動は、家族や個人、都市と農村の間に様々の問題が露呈されるようになった。人々の便利さと安楽さへの物質的追求は、知らない内にだんだん自然の破壊、資源の枯渇、大

気の汚染、産業廃棄物の処理問題などが、自分自身の身の回りの問題として肉迫されたことに人々が気付くのにはそんなに時間を要しなかった。こんな産業化の否定的側面の出現は、西洋の二分法的であり、機械論的世界観がその背景であると言われている。物質的豊饒と便利さが必ずしも人々に幸せと喜びをもたらすとは言い切れない。人々は今まで味わったことがない不安と孤独を感じ始まった。それはまた違う産業化の贈りものである。

産業現場の生産性増大と効率化のため登場したコンピュータと自動化システムは、社会構造の枠を変えてしまった。さらにインターネットの普及は本格的な情報化時代を開くことだけではなく、世界観やパラダイムも変えてしまった。つまり、機械論的世界観から有機体的世界観への変化である。

農耕社会を背景にして誕生、成長した世界宗教らは、短い期間の間に生産構造が急変することによって、政治、経済、文化社会構造がその根底から揺られることに従い、社会に対する宗教の役割が何かを問い直されるようになった。二度にわたる世界大戦による大量殺傷と大量破壊は、農耕社会が持っていた素朴な幸福と平和をねこそぎ奪ってしまった。世界は前例がない不安と恐怖へ落ちられたのである。宗教と宗教人は二度に亘って凄絶な世界的殺傷劇を経験しながら、なぜこのような悲劇を停止することができなかったのであろうか。その後も愚かな人間は、殺傷の道具を放さずにもっと強力な武器を生み出した。核兵器の開発と拡散である。

両大世界戦争が局地的破壊と殺傷であるのに対して核兵器は地球全体を破壊して全人類を殺す地球全面戦なのである。今、人間は地球全体をただ一度で破壊することができる可恐るべき手段を持っている。しかも憤怒と欲望に従って、

どんな行動もできるがんぜない子供みたいな人々にその鍵を握られている。世界の至るところで絶えず起きている戦争は、もうこれ以上生産力と資源確保のための戦いだけではないようである。最近のアメリカの「同時多発テロ」とアフガニスタンへの報復攻撃は、湾岸戦争のような強大国と石油資源国との資源争奪戦ではない。端的に言えば、宗教戦争であり、「文明の衝突」である。この報復戦争で果たして世界のテロが終息され、平和がもたらされるか？　今までアメリカが世界の至るところで平和維持の名目でやってきた戦争によって、人々は本当に平和と幸福を味わうようになったのであろうか。アフガニスタンの罪もない民間人の子供たちが犠牲にされ、飢えと寒さに震えている姿を見ながら、アメリカが言う世界平和のための政策と行動がどれほど幼稚であり、欺瞞的なことは明らかである。

情報化時代のネットというのは、『華厳経』のインドラ網の重々無盡世界とよく似ている。世界はだんだん仏教の縁起的世界の実相を人々に悟らせるように変化している。まさに世界は固定不変の実体がない縁起の世界たるものを証明しているようである。重層的であり、多元的な関係の連続が世界の実相である。しかしながら、まだ世界は排他的な唯一神的宗教が根強く紛争と葛藤を生み出し、人類は滅亡の危機に瀕しさせている。

キリスト教の唯一神思想とその世界観は世界文明の発展をもたらした。しかし今回のアメリカのアフガニスタン報復戦争を見ると、その唯一神思想が決して人類救済と平和の代案ではないことがなおさら明らかになってしまった。新しい世紀のまた違う危機に向かっている世界のため仏教徒が何をどういうふうにしなければならないかは明らかである。今は神と人間、精神

孟　東燮（宗黙）

ふりがな	メン・ドンソプ
生年月日	1948年08月23日　満52歳
国　　籍	大韓民国　ソウル市
現住所	京都府京都市南区
学歴・職歴	
1979.01	海印寺へ出家
1980.01	海印寺で沙彌戒受戒
1980.03	海印寺で比丘戒・菩薩戒受戒
1984.01	海印寺僧伽大学大教師終了
1996.08	日本　花園大学大学院修士過程終了
1996.09	高麗大蔵経研究所研究員
1997.01	アメリカ　カルフォルニア州立大学修学（1.6年間）
1999.02	中国　北京大学中文科修学（１年間）
2000.04	日本　花園大学大学院博士後期課程入学
2001.06	同上　二年次在学中

と物質、国家と国家、自と他というのは、固体不変の実体ではなく、ただ関係そのものであることを悟るよき機会かもしれない。

戦争の不安と飢えと寒さに震えている人々を助けるための積極的であり、実質的な活動をまずしなければならない。これに対して仏教徒としては、もっとも根本的な変化と誓願が必要となる。まず仏教徒は少なくともこれ一つの誓願を起こさなければならない。これ以上地球上の一切の生命あるものを殺さないことを誓い、他の人々が一切の生命あるものを殺さないように限りない大誓願を発しなければならない。なぜならば、この誓願があるからこそ他の四弘誓願も成り立つし、世界の平和も叶うからである。